

くろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十一年十一月一日発行(毎月一回一日発行)
第十六卷第七号(通巻第一八七号)

鈴



くろっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第187号

11. 2009

生姜湯

品川 鈴子

城千草姫の付く名を指折りぬ

生姜湯を饗す深夜の遠乗りに

山家にて形見の襦袍手放せず

胸底も朽葉溜まりの回遊池



築山の紙燭に溢れ散紅葉

落葉浮く飛石ワルツステップで

左棲取らさる雨の七五三

歩かさずおんぶ土砂降り七五三

落人島姫野牡丹の貴人色

嘴太の烏ついでむ冬薔薇



玉

鈴

吟

愛媛 久保田由布

燈を打ちて翹ぼるぼろの火取虫
倒伏の稲抱き起こし凭せ合ふ
うそ少し混じる思ひ出盆の客
揃ふべきところは揃へ婆踊る
人間に逃げてばかりの穴惑

兵庫 栗田武三

算数と国語のドリル盆の客
行く先は精霊蜻蛉に聞いとくれ
襦袢着て火鉢囲んで我慢会
暑いですねえと云ふなよ暑いから
夕端居日本全土が射程内

大阪 小阪律子

山滴るスイッチバツクの三段目
奥貴船川床に主なき利休下駄
碧き瞳の医師はアロハで讃岐弁
宇宙人の影をたどれば吊し烏賊
ピラミッド仕立ての西瓜王家の紋

大阪 小林 玲子

すれちがふ羽音はげしき虫籠と
梅雨明けの富士うす雲を腹に巻き
菓草の採取いましめ山開き
上野山ディナーがおまけの虫狩
梅花藻の流れに脚立松手入れ

香川 近藤 倫子

桑の実や近所付き合ひまだ難し
好物は未だ変はらず生身魂
心太出して長居を許しけり
休暇果て旅の話の話を聞くばかり
テナントの借り手無きまま虫の秋

兵庫 坂口三保子

法金剛院見事に鉢の蓮咲かす
背丈越す程に咲きたる鉢の蓮
庭に來し蟬の声にて目を覚す
御輿舁く子等は揃ひの法被にて
新涼や曾孫も揃ひ十三回忌

兵庫 佐方 敏明

靴から顔出す小犬白日傘
駅毎に浴衣の娘乗り込みぬ
早朝の山に歌の輪踊りの輪
木の下へそつと落蝉移す妻
冷し水術後の妻の口元へ

東京 佐田 昭子

烏瓜伊予は地つづき海つづき
十六夜の月瀬戸内海なめ渡り
霊山の日の出を拝む秋遍路
同行二人の杖を納めし柿日和
外来種ばかり増えけり大花野

兵庫 塩出 眞一

涼新たオランダ坂が神戸にも
ゴンドラで来て麝香草嗅いでをり
水母寄す地震崩れの岸壁に
球場の土を袋に終戦日
鯛雲母の在所は水豊か

香川 島内 美佳

満席で歌ふ幸せ百合の花
皆の振りピタリと決まり仏桑花
ビール飲み自慢の喉を披露する
夏館よりバーベキューの煙出づ
百人の弁当作り玉の汗

大阪 島 純子

吉備の崖つんつん競う今年竹
良きことを告げても動く盆の墓
病める友汗のリハビリ力づく
めぐり会うとき六甲へ梅雨の日矢
梅雨晴の出船入船に子ら走り

大阪 島本 知子

蝉時雨女優の訃報流れをり
扇風機課長の横で首を振る
視力良き子供に聞いて蚊を打ちぬ
蝉持つてにこにこ歩く女の子
うどん屋の大將無口汗光る

愛媛 鈴木 てるみ

お花畑過ぎ迷ひ入る遭難の嶽
子もいずに救急入院秋の雷
夏瘦せて入院パジャマ緩くなり
盆座敷鉦打ち球児応援す
フェラガモのコンビの靴も黴湿り

大阪 鈴木 浩子

橋上に窺ふ鮎の釣れ具合ひ
鍬を振る吾が子涼しき地鎮祭
読み難き塚の六首に汗しとど
梅雨深しブードルの尻尾黄に染める
遊船の半被のまゝに保津帰宅

薬草歳時記

(二八六) ノキシノブ (忍草)

須賀悦子

御廟年経て忍は何をしのお草

松尾芭蕉

小倉百人一首の第百番

順徳院

もしきや古き軒端のしのぶにも

なほあまりある昔なりけり

「順徳院御集」の詞書で、建保四年秋、順徳院二十歳の頃の作といわれている。順徳院は後鳥羽院の第三皇子で、十四歳で即位したが、承久の乱で敗れ、二十五歳で佐渡に配流、在島のまま四十六歳の生涯を閉じた。

「もしき」は、「百敷」「百磯城」と字を当て、枕詞の「もしきの」から皇居・宮中の意になる。武家の専横による皇室の権威の衰えを嘆き、今とはあまりに違う過去の米を「しのぶ」、順徳天皇の深い悲嘆の想いを、文頭の芭蕉の句は、御廟と忍草に詠んだのであろう。

「忍草」は、衰退した家の象徴的な表現にもなって、今和歌集、枕草子、源氏物語の須磨の巻にも歌われている。半日陰の屋根や軒、崖面、岩上、大木の樹皮上に生え、寒さに耐え忍び越冬することから「しのぶ」といわれた。

薬用になるのは「軒忍」「八目蘭」「深山軒忍」である。

「ノキシノブ」は、日本各地、朝鮮半島、台湾、中国に広く分布し、古くから民間薬として、中国、日本で用いられ漢方にも処方されている。止血、解熱、利尿、浮腫、解毒消炎などの効果があり、淋疾、腎炎、結核、血尿、百日咳口腔炎、扁桃腺炎に用いられている。また、外用薬としてでき物や腫れ物などにも使われているが、全草（瓦草）を必要な時に採取し、水洗い陰干しにして充分乾燥させ、この乾燥全草を細かく刻み、ゴマ油に浸し一、二カ月程置いて患部に繰り返し塗布する。俗説には、根を浸した油を塗ると発毛するとも伝えられる。

私事になるが、昭和十年に建設された数寄屋造りの家の庭に楠の大樹が七本あった。日陰になっていた楠の樹皮に軒しのぶが生えていたが、平成七年の大地震で家は全壊し、日陰の楠三本は根本から伐採されて仕舞って、現在ある楠には、軒しのぶは生えていない。多分この家の崩壊を軒しのぶが暗示していたのかもしれない。

参考文献 『牧野和漢薬草大図鑑北隆館』

『小倉百人一首』犬養廉訳・注創英社

『百人一首』鈴木日出男著ちくま文庫

『王朝の植物』近藤浩文著カラーブックス

著者略歴 神戸薬科大学卒、薬剤師

ノキシノブ〔ノキシノブ属〕(うらぼし科)

ヤツメラン、イツマデグサ、マツフウラン、カラスノワスレグサ

Lepisorus thunbergianm (Kaulf.) Ching
 (= *Polypodium thunbergianm* (Kaulf.) Makino)

軒忍、八目蘭

葉：線形単葉
 表面は深緑色
 裏面は淡緑色



胞子のう群は
 葉の上半部
 の裏面に

須賀
 悦子
 画

薬用部分：全草

半日陰の樹皮上
 屋根の軒下
 岩上、崖面等に生える

草丈：10～30 cm

根茎が横走して葉が並び出る

陰干しにして乾燥

ミヤマノキシノブ〔ノキシノブ属〕

深山軒忍 (うらぼし科)

草丈：15
 ～30cm

葉：紙状
 革質



根茎が長く葉の間隔が広い

樹皮の
 苔上にも



E. S.

軒しのぶ街道筋の万屋に	盆栽展隅に置かれし軒忍	とにかくは初心にもどれ軒しのぶ	しのぶ草摘みぬ案内の蘆花夫人	軒忍げぶるが如し庵の月	盆過ぎや朽川舟の忍草	しのぶ艸庇にうゑよふはの関	真間の井や道を千尋にししのぶ草	古君の軒や浮世のしのぶ草	老松や右近のばばをしのぶ草
* 藤田かもめ	* 中島 節子	* 須賀 悦子	瀧 春一	中村 汀女	中村草田男	小林 一茶	大島 蓼太	炭 太祇	斎藤 徳元

(* ぐろっけ)

鈴の奏

品川鈴子選

弱よわ吟ぎんにしをる面おもてや花芒 兵庫 太田 實

秋闌けて狐の茶袋煙を噴く
落葉搔くにはか翁の布袋腹

年の瀬や筆架墨床展べしまま
ちぐはぐの会話も終り遠花火 兵庫 池田 久恵

引き揚げの五才の話し残暑かな
ふんわりと風船かずら誰が吹く

夏到来なま返事して読書かな
周平をまた読み返す蝉しぐれ 三重 金子 清孝

朝採りの茄子を仕分くる老夫婦
かしこくも皇居に御座す竹煮草

虫の音もゆつたり聞ゆ隠居の身
梅雨明けず写経の筆を替へてみる 兵庫 林 哲夫

片蔭にボスがひそみて女掏摸
人形を抱きしジプシー草いきれ

露のみち自転車ズズ泥の田へ
遠吼えの犬にも溽暑厳しくて 愛媛 城下 明美

蟻払ひ末期の蝉に水をやる

面映ゆく案内さるまゝ敬老日

一閃の虚空を横切る黒揚羽

懸命に動く子子同じ場所 香川 石川 裕美

絡み合ふ二人の小指揚花火

下っ端の我が上座で昼寝覚

揚げ足を取るばかりなり飯の汗

装いたる言葉捨てたし夏座布団 山口 山本 敏子

又一寸伸びて浴衣の揚げ直す

感情線うすき掌の吾も根無草

海浜のみなしご海星漂えり

桐一葉散りて静けさいや増しぬ 兵庫 堀口香代子

桐一葉落つるが如く友の逝く

文月とや父の召されし年となり

風鈴を置き土産にし母逝きぬ

アロハシャツ胸に十字の光りもの 兵庫 森山八重子

宇宙より還り涼しき目の会见

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子評
四句〜十五句 後藤とみ子 〃

*選句は全て 品川鈴子

弱吟にしをる面や花芒

太田 實

「しをる」には、為居る・栞る・枝折る・責るの漢字が当てられ、いずれも能舞台での仕種。萎るはうつむいて掌を目の前にかざし、涙を押さえる様子です。

弱吟とは謡曲の発声法のひとつで、強吟にくらべて音域が広く音階も安定し、声の顔動は規則的。おもに優美や沈痛の表現で、花芒を手折る女面が情念に翳る。

引き揚げの五才の話し残暑かな

池田 久恵

命がけで引き揚げてきた話を、残暑の頃にはきまつて聞かされた。子供連れでは親子ながらに大変な苦勞をしたに違いない。五歳の記憶は大人の語りに補われて生涯忘れ難く、どんな難儀にも耐え得る力となった。

周平をまた読み返す蝉しぐれ

金子 清孝

藤沢周平（一九二〇〜一九七九）は山形県生れの小説家で、政争に巻き込まれた下級武士や市井の人々の生き方を、端正な文章で活き活きと描く。その庶民的な正義感や仄々とした人情味に多くの愛読者がいて、代表作「暗殺の年輪」「蝉しぐれ」などを、心のふるさとのように蝉声に誘われて読み返す。

梅雨明けず写経の筆を替えてみる

林 哲夫

例年ですと七月半ば過ぎには梅雨が明けるのですが、今年梅雨明け宣言もないままに蒸し蒸しとした真夏になりました。この厳しい暑さでは、私などだらけてしまいました。ところが作者の方は、筆を替えてみるという言葉からもうかがえるように、きちんと居住まいを正して写経に取り組んでおられるんですね。感心いたしました。

蟻払ひ末期の蝉に水をやる

城下 明美

ご自宅のお庭でしょうか、あるいは玄関先でしょうか。

たまたま通りすがりにこの蟬の姿を目にされ、これも何かの縁かと丁寧に扱われたのでしょう。見すごしてしまいそのような光景を、見過ごさなかつた作者のお人柄や心の豊かさ
が伝わってまいりました。

懸命に動く子子同じ場所

石川 裕美

まず子子という漢字をぼうふらと読めるまでに時間がかりました。ぼうふらは水たまりがあると、すぐ発生する生命力があります。子子は水たまりのなかを上がった下がったり懸命に動きます。やがて蚊となつて飛び立つてゆく。ちよつときらわれ者のぼうふらですが、その一生懸命さは健気ですね。

装いたる言葉捨てたし夏座布団

山本 敏子

なにか大切なお話があり、訪問された先でのことでしょうか。ざつくばらんに核心に触れる話しがしたいと望んでおられる実感がよくわかります。

文月とや父の召されし年となり

堀口香代子

文月（陽暦八月上旬から九月上旬）にお誕生日を迎えられた。今年の作者の方の年令は、丁度お父様が召された年令でした。いつもの誕生日とは少しちがう感慨を持たれた事でしょう。あらためてお父様を思い、お父様への感謝の気持を持たれたと思います。お父様も天国からお誕生日を祝つておられる事でしょう。

骨切りの音軽やかに夏料理

森山八重子

骨切りと言えば、やはり鱧の料理でしょうか。私は骨切りは魚屋さんでもらうものと思っていました。ご家庭で骨切りをなさるのでしょうか。自在で手ぎわのよい包丁使い、そして軽やかな骨切りの音が聞こえてくるようです。目にも涼しげで美味しかったです。ようお膳が想像できませぬ。（以下略）